

お盆参りを終了いたします

長年続いてきた毎年恒例の各々家庭へのお盆参りですが、今年をもって終了させていただきます。その理由といたしましては、年々予定どおりに各お家に伺うことが困難になっていることです。

▼昔のお盆参り

昔のお盆参りは「何日に伺います」とだけお伝えしておけば、ご家族は一日中自宅を待っていてくれたそうです。一日中と言っても、お盆になれば子供たちが帰省し、親族も集まってみんなでお盆休みを過ごしていたものです。そこには「お邪魔してお勤めをして」というお言葉が非常に少なく、実家が集まって過ごすことが非常に少なくも増えてきました。

▼お留守でもお勤めしていた！?

先代住職の頃には、お盆の日程を境内に貼り出しておけば、だいたいの時間でお参りができたそうです。伺った時間に留守であったとしても、玄関のカギは開けてくれていて、勝手に家に入ってお勤めをしていたそうです。今では考えられませんね。



▼予定表(ルート)の作成

お盆参りの予定表は、毎年六月末になると作っています。できるだけ効率的にお参りできるよう、お住まいの地域ごとにルートを設定しています。今年はネット地図(ルートマップ)を活用するとかなり効率的なルート作成ができました。

しかし、せっかく効率的なルートを作成しても、日程変更や時間変更になる場合があります。多くはお仕事と重なっている場合です。

▼来年からは

各々家庭へのお参りはいたしません。八月十三、十四、十五日のお盆期間中、本堂にて合同お盆法要をお勤めします。一日にできるだけ多くの回数お勤めしますので、みなさんはお墓参りのついでにお好きな時間に来ていただきます。もちろん自由参加です。(お布施不要) お勤めの後は、法話を致します。仏さまや仏教のお話です。

今後は、お盆の合同法要を充実させることに力を入れていくことになりました。詳しくは来年のお盆前にお知らせいたします。

▼それでも

さて、それでも、「日程は合わせる事ができるから、お盆はやはり自宅の仏壇でお勤めをしたい」などのご要望があれば、六月末までにお知らせください。大阪など遠方でも喜んでお参りさせていただきます。その場合は十三日までにお伺いいたします。ご了承ください。

▼僧侶仲間

毎年お盆には一日中バイクで走り回っています。期間中に僧侶とすれ違ふときは「ご苦労様」の意味でバコッと頭を下げるのがマナーとなっております。私がお参りを始めた頃はたくさん僧侶とすれ違ったものですが、近年はめっきり少なくなりました。

すので仕方がありません。日程変更を希望される多くの方は十三、十四、十五日のお参り予定以外の方々であるという事もうなずけます。

▼増えるお葬式

一番難しいのは、期間中にお葬式になった時です。実は今年も期間中に三件のお葬式がありました。そのうち二件のご遺族には、通常はあり得ない朝九時開式とするなど無理を聞いて頂いて、その日のお盆参りは午後からにずれて頂き、当日の初七日はなしというご対応をさせて頂きました。残る一件のご遺族には、お盆開けまでお葬式を待っていただきました。

お葬式の件数は近年急激に増加しています。善称寺では週に一、二回のお葬式が行われており、今後はますます増加すると見込んでいます。来年のお盆期間中も同じかそれ以上のお葬式を行うことが想定されます。

▼対策として

まず最初に検討したのが僧侶の増員です。うちは娘が一人ですがまだ一歳ですから当面はあてができません。そこで資質のある人に僧侶の資格をとって頂き、お葬式や法事を

異常な暑さの影響で、バイクではなく車やタクシーを利用する僧侶が増えたこととその一因ですが、一番の要因はお盆参りの制度そのものを取りやめた寺院が増えていることとでしょう。

私は、大切なものは、時代や状況に合わせて変えていくことで残されていくと思えます。お寺でいう大切なものは「お釈迦さまの教え」です。浄土真宗のお寺であればもう一つ「親鸞聖人の教え」です。これらは絶対に変わることなく受け継がれてきました。今後もそうです。伝える手段は変わっても、その内容(本質)は変わらないのです。

お墓やお葬式のイメージもずいぶん変わってきました。今後は「変わらない為」に、変わり続けていくようなイメージでお寺の運営に取り組んでまいります。大切なお釈迦様の教え、親鸞聖人の教えを聞く縁をくださるのには、他でもない先祖さまや先立たれた故人であることを忘れてはなりません。

分担してもらってはどうかという案です。一般的な会社であれば社員を雇うのと同じですね。この案については、お盆参りの対策として以外にも引き続き検討していく必要があるでしょう。

もう一つは引退した前住職の復帰。本人に「お盆参りだけでも分担して欲しい」と打診してみました。しかし「体力に自信がない」とのことでした。しかしこちらも引き続き説得してまいります。まだ七十歳になっていないですし、ゴルフには喜んで出かけていく前住職ですからね。

このような次第で、結局、現段階ではこれといった解決策が見出せておりません。

